

十 最後

晴々とした七月の空に、濃い緑の手をいつぱいに廣ひろげた林の中に、時々馬の嘶いなゝく聲が聞えてゐました。樹の間まの奥には、何やら罵のゝしりわめく雑兵ざつべうどもの姿が、ちら／＼して見えてゐました。それは外ほかでもない、英吉利軍イギリスの榮所えいしよでございました。猶一層奥にはひとつたところの廣場ひろばには、多くの騎士や兵卒へいそつやらが屯たむろしてゐて、何やらひどく

興奮し激昂げきこうしてるやうすでございました。その砦の上には、指揮

官のリオネルが、床几しやうぎに腰をかけて、いたくしく鎖くさりをかけた、一

人の少女を前に引据ひきすゑて居りました。あゝ、それは誰あらう、神の

少女のジャンヌでございました。

まことに、量り知られぬものは人の運命でございました。きのふ

までは、佛蘭西の救ひ主、神の使つかひよと崇められた身が、今日は三重みへ

の鎖に、悉くことごとくの自由を縛いましめられた英軍の捕虜、あらゆる罵詈ばりの言葉、

あらゆる辱はづかしめの詞ことばは、復讐に燃える英人えいじんの口から、飽くことを

知らず、その一身に浴びせかけられるのでございました。

凄すさまじく鳴りはたゞく雷鳴の中に、たゞ一人残されたジャンヌは、

忌はしい魔法使ひの名の下に、誰一人として劬いたはる者も、省かへりみる者もない、廣野くわうやのやうな世の中を、神の導く運命のまゝに辿たどらうと決心したのでございました。神の力でなくて、どうしてあれだけの仕事ながジャンヌに爲し終へられたでせう？神のみ意こころに選えらまれた自分の價值には十分の自信があつても、一度煩悩ぼんのうの苦しみを抱いた胸を、神の御名おんなによつて、どうして淨きよいと斷言だんげんすることが出来ませうか？また、父の口から出たのではあるけれど、それこそは神の思召おぼしめしと悟つたジャンヌは、靜かに／＼その命令おいひつけに従つたのでございました。それは決して誤謬あやまりではなかつた、とジャンヌは自分で自分の胸に言ひました、天の御錠ごじやうだつたのであると。

目も眩くらむやうな名譽めいよの光りに包まれて、人が猜そねむほどの價值かちがあるやうに見えた時は、むしろジャンヌの苦痛の時でございました。國王からも、人民からも、または義理からも情からも、あらゆるものから追放されたジャンヌは、不思議に甦よみがへつた平和を、その胸のうちに抱いだくことが出来ました。暴風雨はジャンヌの心を淨きよめて去りました。来るものを拒こばまず迎へ入れようとする宏ひろい心は、苦惱くるしみを送つたものが、苦惱を解といてくれるのを俟まち、ジャンヌを咎とがめて追放した人々が、いつかはおのれの過失あやまちを後悔して、その運命に涙なみだを濺そそいでくれる日が、必ず来るであらうのを信しんずるのでございました。

昔牧かひ馴ならした小羊が、草を喰はむのから自然におぼえて、毒があ

るものや、無いのや、または身體に滋養じやうがあるのやを、見わけるところが出来ましたので、たとひ木の根草の根を喰たべものにしてなりと生きられることゝ、ジャンヌは少しも悲しみませんでした。

かうして敵の陣營間近ちんえいの林中まで辿たどつて來た時、圖らずも軍卒を從へた女皇ちよくわうのイサボオに見つけられて、ジャンヌはどうく捕虜とりことなつたのでございました。そして、自分が今、リオネルの陣所ちんしよに引かれつゝあるのを知つた時、ジャンヌは全く、たとひどんな戮なぶり殺しでも、この苦痛には及びもつかないであらうと嘆かれたのでございました。

暫くの間、二人の無言は續きました。と、そこに急いでやつて來

た一人の騎士、『いや、どうしても駄目でござりますぞ。宥なだめれば宥る

ほど、者共ものどもは烈はげしく怒いかりたつて、「少女を殺せ！少女を殺せ！」と叫

んで居りまする。まゝあなたも全軍の輿論よろんに従つて、早く女めの命

を絶たたれたがよろしうござりませう。その素そつ首くびを蹴けちらすことが

出来ましたなら、兵士どもゝやうく満足するでござりませうから。』

女皇じよくわうのイザボオは、物々しい甲冑かつちゆうに身を固かためて、その眉まゆの間に激げき

昂こうの色をみせながらはひつて來ました。

『梯子はしごをかけてもう登りはじめましたぞ。リオネル！ はやくあの

兵卒どもを鎮しづめられい。滅多無性に暴れ廻まはるあれらにこの砦こはを壊さ

れて、我々の生命いのちを危あやうくするまで、待つて居られるといふのか。さ

あ、どうあつても、その女生いかして置くことは出来ませぬ！』

『いくらでも、狂くるふなら狂くるはしてお置きなされ。どうして／＼この堅固な堡砦けんこがあいつらの暴力で崩くづれ申しませうか。もしまた、さういふことでもござりましたら、わしはその下に埋うづまつて死ぬだけのこと！　なあ、ジャンヌ、どうぢや、まだわしが心に従したがはれぬか、世間にそむき、御身まもを武器で護まもらうと思ふのぢやぞ。』

『あなたは、眞しんの男でございますか？』

『今、この危急ききふの場合にのぞんでも、御身おんみの友は御身みを見棄すて、恩義を忘れて誰も救はうとはしないでないか。それだのにこのわしは、民たみにそむき味方にそむいて、たつた一人の御身の友とならうとして

ゐるのだ。』

『いゝえ、あなたは何處どこまでも佛蘭西の敵で、またわたしの仇敵かたきでございます。わたしどもの間には、何等なんらの友誼いうぎがある筈はずもなければ、またあつてもなりませぬ。しかし、もしもあなたが、ほんとうにわたしに愛あいがあるならば、それは、かういふことでなければなりませぬ——英吉利イギリスの軍隊を悉く、わが佛蘭西の國界こくかいから遠くへお導きなさい。捕虜とりことなつた市々に、みんなその鍵かぎをお返しなさい。分捕物ぶんどりものを償還し、人質を残らず解放しなければなりませぬ。わたしは、わが國王陛下の御名おんなによつて、その平和を命じます！』

イサボオは齒はがみをして怒りたち、『やあ、捕虜とりこの分際ぶんざいで、我等われらに

命令を與あたへようとしやるか！ リオネル、これでも卿おんみは、猶なほあの魔ま
法ほうづかひ使つかめを生かして置きなさる御所ごしよぞん存ぞんか？』

『それは、きつと實行じつこうされなければなりません！ わが佛蘭西は、
いつまでどうして英國軍の殘虐ざんぎやくに堪こたへてゐられようか、間もなくこ
の佛蘭西は、英吉利人の一大墳墓いちだいふんぼと化くわしてしまふであります。そ
の時こそは、あなたの名譽めいよも葬はうむられ、その力は失はれてしまふので
すぞ。』

ジャンヌの意氣いきは、再び盛んにその身うちに燃え出しました。と、
此時このとき、一人の司令官が、拍車はくしやの音を慌あはたゞしくたてゝやつて來まし
た。

『方々、はやく出陣の用意なされい！ 佛蘭西の軍勢は今、この道路を眞一文字に攻め寄せてまゐりまするぞ。』

その聲を聞くよりジャンヌは突つ立ちあがり、手足の自由も利かぬ身を忘れて、勇みたちました。

『おゝ、わが佛蘭西の軍勢が！ やい、傲慢無禮な英國人、はやく戦場に急がれい、お前達が最後の勇を鼓すべき時は來ましたぞ！』

『ふゝ、その喜びも、日の暮れぬ先に、生命と共に消えてしまふであらうよ！』

『わたしの友は勝利を得、わたしは遂に死ぬであらう！ おゝ、勇氣に充ちた佛蘭西の諸將よ、今こそ卿等は、少女の援けを要しない

であらう！』

待つてゐたものはつひに來ました。それは佛蘭西が、佛蘭西を救はうとする自覺でございました。やうく勝利の快樂に馴れ初めた佛蘭西人が、その救ひ主の少女を、魔法使として追放してから、不運は不思議にも再び佛軍に還つて來ました。士氣は沮喪し、勇氣は挫けた味方の軍勢が、憚り氣もなく敵に背を向けるのを、むしろ奨勵するが如くさへみえた時に、シャルルを初め人々はみな、初めてそこに目が覺めたのでございました。悔いてみれば、どこ一點として怪しむ箇所のない少女を追放したことは、神慮を拒んだ報いの恐ろしさを佛蘭西人に知らしめました。さうして、どうしてこの過失

を償つたらいゝかに迷つてゐた時、一人の旅僧が飄然と佛蘭西軍の陣營を訪れて、ジャンヌが捕虜になつて敵陣にあることを告げて去りました。

國王は自ら、熱血と生命とを賭けて、ジャンヌを救ふべく兵を起したのでございました。その勇ましい進行曲は、ジャンヌの胸を波うたせました。おゝ、勇ましき我が味方よ、昨日の如く、旗を擔つてその先頭に立つことは出来なくとも、何ものも妨げることの出来ぬジャンヌの胸の力は、おのがまゝに戦場をかけめぐつて、わが佛蘭西軍を勝利に導くであらう！

『さあ、英吉利人、一刻もはやく出陣せられい！』

『こりや、ジャンヌ、斷じて逃走はせぬと誓言せい！』

『いや！ 出来ることなら、それこそはわたしの願ひ。』

『女皇には、合戦の終るまで、此處で少女をお見張り下されい。その守護に兵五十人を残し置くでござりませう。』

『よし、命にかけて守護いたしませうぞ。』

『こりや、ジャンヌ、何事もみな、御身の胸にあることぢやぞ、佛蘭西方に裏切つて、英國軍の旗を持つならば、御身はすぐに許されるばかりか、その血を見ようとせまる兵どもゝ、みな御身の命に従ふであらうぞ。』

『お黙りなさい！ 少し言葉を慎むことを知られよ。それく、も

う佛蘭西軍は近づきましたぞ！』

はるかに喇叭らっぱの音は吹きしきつてゐました。落付おちつきなさうに、リ
オネルが去つたあと、イサボオは猛々たけ々しく劍けんをぬいて、ジャンヌの
傍かたはらに立ち、一人の兵士をして望樓ぼうろうに登らしめました。

『そこより、戦いくさの模様を一々いちくつ告げい！』

金鼓きんこの響ひびきは調子を早め、佛蘭西軍のあげる関の聲は、あたりに飴こたま
して空にも届くばかりでございました。

『進め！ 佛蘭西軍、神の與あたへる最後の勝利をうけよ！』

手は厳しく縛いましめられ、足は鎖つなに繋がれた身も忘れて、ジャンヌは
恰あだかも佛蘭西軍の陣頭にあるが如く叫びました。

『戦さの模様はどうぢや?』

『おゝ、もう接戦の眞最中でござります。あれく、虎の毛皮を敷

いた駿馬に跨つて、兜をつくやうな怒氣をふくんだ勇士が一人、佛

蘭西軍の眞つ先に指揮をとつてござります。』

『おゝ! それこそ確かにデュノア伯爵、あゝ勇ましい武士よ、あ

なたのゆくところに、勝利は必と従ひませう!』

『ブルゴンディ公爵は、橋を防いで居られます。』

『えゝ忌々しい裏切者、わが呪よ、槍の穂先となつて二肢武士の胸

板を貫け!』と、イサボオは齒がみをして、『佛蘭西國の皇子は見え

ぬか? 王の旌旗は翻らぬか?』

『砂煙^{すなけむ}りは空^みいつぱいに漲^{みなぎ}つて、まだ何ものも見えませぬ。おゝ、濠^{ほり}のあたりに烈^さしい騒動^{さわぎ}が起りましたぞ、やゝ、大將方^がの戦^{たた}ひでござります。』

『英吉利の旗は翻^{ひるがへ}らぬか？』

『この上もなく得意さうに見えて居ります。』

『あゝ！』と、ジャンヌは胸^{むね}を絞^{しぼ}られるやうな嘆息^{たんそく}を洩^もりました。その望樓^{ぼうろう}に登^{のぼ}ることが出来^でさへしたならば、どんなに小さなものも見落^{みお}さず、大空^{おおぞら}を翱^かけゆく鳥^かの數^{かず}も讀^よまれて、味方^{あか}の戦^{たた}ひを護^{まも}ることが出来るであらうのに！

『やつ、なんとしたことぢや、味方^{あか}の大將^{だいしやう}は敵^{かき}に圍^{かこ}まれました！』

イサボオは劔つるぎをジャンヌの胸につきつけました。『魔法使め、觀念
せい！』

『あ、圍かこみは解かれましたぞ、リオネル殿が驅かけつけられて、累かさな
り合たいごった隊伍しやにむにを、遮し二無二破むにられましてござりまする。』

イサボオは劔をひきました。

『やあ逃にげるわく。』

『逃にげる？ 味方か？ 佛蘭西兵か？』

『勿論佛蘭西もちろんの奴やつばらでござりまする。——おゝ、其所そこへ來る一騎
は、どうやら皇子わうじのやうに見えまするが——おゝ深手ふかてを負おつて居
まするぞ。』

『味方のものか？ 敵のものか？』

『や！ チュノア殿は兜かぶとを剥はぎとられました。』

『神様！ あなたはこのジャンヌをこのまゝ御見棄おみすて遊ばすので

ございますか。あの、わたしは、足械あしかせをはめられた、たゞの女に過

ぎぬのでございますか！』

ジャンヌは身も世もなく身悶みもだえました。どんなに力を籠こめて見て

も、鎖はますく手首くに喰いひ入るばかり、足の械かせを外はずさうとすれば、

繋つないだ鎖に強く引かれて、どうと横さまに倒れるのでございました。

『あれく、あれを御覽ごらんなさりませ、黄金こがねをもつて縁ふちとつた、空色

の衣きぬを召したのは、どのやうな人でござりませう？』

『おゝ陛下！』と、ジャンヌは倒れながら叫びました。

『その乗られた馬は進むのを嫌つて、おゝ、躍りあがつて、おゝ躓いて、やれく、御しかねて困つて居られますわい、その隙に味方の兵は突進して行け——さうだく、占めたつ、取圍んだでござりまするぞ。』

『あゝ！ 天はもう天使を下し給はりませぬか！』

イサボオは、嘲笑ひながら、ジャンヌの身悶えを氣持よさうに眺めてゐました。『佛蘭西の救ひ主とやら、今が大事の時ぢやないかい。』

ジャンヌは、不意に起き上つて跪き、肉も燃えるやうな、烈しい

全精神をもつて天に祈りました。『おゝ神様！どうぞわたしが一生の祈願いのりをお聞き取り下さいませ。どうぞ聖靈せいれいを下くだし給はりませ。あの切れやすい蜘蛛くもの巣すをも、丁度いかり錠の綱つなのやうに強く遊ばさるゝ神様、この縛めいましを切れやすい蜘蛛の糸と變かへるのに、何の雜作ざうさもございますまい。この鎖くさりをたち切つて、敵の侮りあなどのうちから、少女をとめをお救ひ下さいませ。』

『萬歲ばんざい！』

『なんとしましたぞ？』

『王を捕虜とりこにいたしましてござりまする。』

ジャンヌは躍り上をどりました。
あが

『神よ！ 恵みを垂れたまへ！』

満身の祈りを籠めて、ジャンヌは烈しく兩の手を張りました。この時、譯もなく自由になつた手は、素早く足の鎖をつかんで、ずたにそれを千切つて捨て、あまりの驚きに、たゞ茫然としてたつた兵士の傍に進み寄るより早く、その劔を奪つて、一散に堡砦の梯子をかけ下りるのでございました。

目で見ぬ人は、それを決して眞實とは思はなかつたでせう。イサボオをはじめ、人々は暫く口も開かれずに、そのあとを見送るばかりでございました。

ジャンヌの姿は、翼をもつたものゝやうに戦場を走り廻つて見え

ました。

『^{ひつかへ}引返されよ、佛蘭西の強^{つは}ものだち！ 神の少女^{をとめ}は再び現はれたる

ぞ。全軍^{ぜんぐん}前へ、前へ！』

四散した佛蘭西兵は踵^{くびす}をかへしました。ジャンヌは、亂れた軍勢を糾合^{きうがふ}して、新たに隊伍^{たいご}を整へ、眞^ま一文字に王の重圍^{ぢゆうゐ}に突進しました。それは時の間ではあつたけれど、目覺^{さうたう}しい争闘でございました。

シャルルはジャンヌによつて、再び救ひ出されたのでございました。さうしてジャンヌは、その事實をはつきりと自分の心に鑄^いりつ

けると共に、その目は視力しりよくを失つてしまひました。

じゅうしやう

お

おほぜい

かこ

重傷を負つたジャンヌは、大勢の兵士に圍まれて、國王とブル

ゴンディ公の腕に支ささへられながら、あるかないかの息をついて居る

のでございました。やすらかに平和なその面おもざしには、なんの苦痛

の影もとめず、人々の僅わづかな希望を、まだ温かい體温たいおんの上につない

でゐました。

をとめ

『あゝ、少女は遂に逝いつたのであるか――。もう二度と再び目ざめ

ることはないのであらう。今、その魂たましひは高く天國に翱かけつて、朕が悲

しみや悔くいを、またと見ることはないのであらう。』

おもて

うれ

とせ

シャルルの面は憂うれひと悲しみに閉とせされてゐました。

ふとかすかに眼をひらいたジャンヌは、思はずよろ／＼と立上り、『もし、わたくしはどこに居るのでございます？』と、うつとりそこらを見廻すのでございました。

『御身の味方に圍まれて、御身の友に抱かれて。』と公爵は答へました。

『御身が君に支へられて、おゝジャンヌ！』

ジャンヌは暫くの間、凝乎とシャルルの顔を見つめて居りました。

『いゝえ、わたしは魔法使ではございませぬ！ 決して／＼、そんな者ではございませぬ！』

『おゝ！ 御身は淨い天使であるぞ。朕が過失をゆるしてくりや

れ！』

ジャンヌは嬉しさうに、あらためてあたりを眺め廻しました。

『嬉しうございます。そんならあの、わたくしは友の中に居るので
ございますか？ 今は人から呪ひのろいもされず、侮りあなどもされぬのでござ
いませうか？ おゝ、あたりがみえてまゐりました——おゝ！ そ
こにいらせられますのは陛下！ 佛蘭西の旗は、あれでございます
か？ わたくしの旗はどれでございますか？ もし、わたしの旗が
見えぬやうでございます。神様がわたくしにお託しなされた、あの
旗がなければ、わたしは逝くことが出来ませぬ。わたしは眞心まごころをこ
めてあの旗を荷になひました。今こそ神様は、それをおうけとり下さい

ませう……………」。

喘ぎく、ジャンヌはうつゝのやうに言ふのでございました。その唇は、次第くゝに色が褪せて行きました。うつとりと瞳を空に据ゑたまゝ、聖旗を手にしたジャンヌは、支へようとする人々の手を靜かに拂ひのけて、そこに獨り立ちました。その唇には微笑が泛んでゐました。

『あれ、あれ、み空に虹はあらはれました。天の扉は開かれました！』

その言葉と共に薔薇色の光りがさつと天上に輝き渡りました。『おゝ、わたしはどうしたのでございませう？ 輝く雲はわたしを

乗^のせ、あれ、だん／＼高くのぼつてまゐります——おゝ！ 大地はもう遠ざかりました！ あゝ！ 限りないこの快樂^{けらく}よ！』

聖旗^{せいき}は、ばつたりとジャンヌの手を離れました。そしてそれを追ふやうにその體^{からだ}はまた地上に倒^{たふ}れました。

美^{うる}はしい薔薇色^{なほ}の光りは、猶^{なほ}ます／＼空に輝いてゐました。

（をはり）

【入力者注】（頁行は底本のもの）

210-9 その平和を命じます！。』 ↓ その平和を命じます！』

211-5 一大墳墓と ↓ 一大墳墓と

216-9 足は鎖に撃つながれた ↓ 足は鎖に撃つながれた

229-2 遠ざかりますた！ ↓ 遠ざかりました！

公開：令和三(2021)年九月九日

改訂：令和五(2023)年三月七日